

前回までのあらすじ

流遠^{るしお}やみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。

今年の夏、ひよんな事から知り合った高校生・橘^{たちばな}アサトに片想い中。

いつものように学校に通い、いつものように放課後はアサトと逢い^あ、いつものように帰宅する——はずだった。

しかし、アサトと別れて帰路に就こうとした時、やみひめの胸の奥が燃えるように熱くなり、息苦しさを動けなくなる。そこに現れた謎の少女・ツバキ。彼女は、やみひめが今日の授業中に居眠りをした際に、夢の中に現れた少女だった。

ツバキに介抱され、やみひめの体調は元に戻るが、彼女達の前に現れた『スライム』の攻撃を受け、窮地に立たされる。戦う力が残されていないツバキはやみひめを逃がそうとするが、それに反発したやみひめは決断する——〈機獣少女^{きじゅう}〉になってツバキの代わりに戦う、と。

他に選択肢のないツバキは不承不承ながら、やみひめの提案に合意し、変身のためのM Bデバイス——〈カグツチ〉を託す。それを受け取ったやみひめは〈機獣少女〉への変身に成功し、戦うための力を手にする。

——〈機獣少女〉の力を。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

『ならば唱えよ。』拘束——と』

「り、拘束！」

ツバキから託された黒い勾玉状態の〈カグツチ〉を手のひらに載せ、やみひめは促されるままに〈カグツチ〉の言葉を復唱する。次の瞬間——やみひめの目の前に広がっていたのは公園の景色ではなく、見慣れぬ部屋の中だった。

「——なんで？ 私、公園にいたのに……」

フローリングではなく、畳が敷かれた床。ドアではなく、障子で仕切られた空間。蛍光灯ではなく、行灯と呼ばれる照明器具に照らされた室内。

「……すごい」

日本人のやみひめでも思わず感心してしまう、現代ではあまり見られないほどに『和』にこだわった部屋だった。

「——気に入ったか？」

突然の声は、やみひめのすぐ近くから聞こえた。左隣、そこに若い娘が立っている。年齢で言えば二十歳手前くらいだろう。長い黒髪をポニーテールにしており、黒い和服が印象に残る。だが、もっと目を惹く特徴がある——獣のような耳と尻尾だ。普通の人間には備わっていないはずのそれらは、しかし作り物には見えない生々しさがある。

「誰？」

「ふむ、判らぬか？」

やみひめの問いに、娘は『判るだろう？』といった顔をした。

「……カグツチさん？」

『さん』は要らぬ。私は道真だ、愛情を以て接してくれるのは嬉しいが、敬意を示す必要はない」

やみひめは脳裏に浮かんだ可能性を口にした。娘の口調や雰囲気、自分が置かれた状況からの推測だったが、正解らしい。確かに、機械らしからぬ人間臭さを持った〈カグツチ〉が人の姿を採れば、このような感じになるかもしれない。

「ここは〈想刻の間〉。我々が〈機獣少女〉となる者と、契約を交わすための場所だ。現実世界とは異なる概念的な世界——仮想空間とでも言えば伝わるか？」

「うん。不思議なんだけど——あなたの事も、あなたの言ってる事も、全部本当なんだって理解出来る」

「当然だ。ここはそういう場所だからな」

そう言って、〈カグツチ〉の化身の娘は不敵な笑みを浮かべた。

「そういえば、まだ其方の名を訊いておらんんだな」

「私の名前はやみひめ——るとお流遠やみひめだよ」

『やみひめ』……?」

やみひめが名乗ると、カグツチは少しだけ驚いたような反応を示した。確かに、『やみひめ』という名前は古風なものだ。今時の女の子に付けるには珍しいというか、少なくとも主流ではないだろう。カグツチに『現代の日本人』の感覚が理解出来るなら、この反応は真まことつ当なものだ。

「あはは。やっぱり、変な名前だと思うよね」

「いや、そうではない。不思議と知っている響きだったのだが、それがなぜか自分でも判らず困惑したのだ。気を悪くしたのなら、すまない」

そう言つてカグツチは、やみひめに対して軽く頭を下げた。

「え!?! いいよ、そんな事しなくて!」

見た目だけなら、明らかに歳上の相手に頭を下げられると恐縮してしまう。同時にやみひめは、そんなカグツチの真摯な態度に好感を覚えた。

「全然、気にしてないし。私は自分の名前、気に入ってるから」

「そうか。それならば、よかった」

ほっとした表情を見せるカグツチに、少しだけ親しみやすさを感じた。古風な言葉遣いや、その身にまとう高貴な雰囲気から、彼女の方こそ『お姫様』のようで近寄りがたかったのだ。なぜ、彼女——今はそう呼ぶべきだろう——が自分の名前に覚えがあるのかは気になったが、考えて答えが出るはずもない。

「では、そろそろ本題に移ろう。やみひめ、そなた其方に問う——本当に〈機獣少女〉として戦う覚悟はあるか?」

「え……?」

「言ったであろう。ここは〈機獣少女〉となる者と、契約を交わすための場所。これは戦いに身を投じる覚悟が本当にあるのか、その最終意思を確認するための最後の機会だ」

やみひめの間の抜けた反応に、カグツチは言い含めるような口調で言葉を重ねた。

「状況が状況だ。選択肢など、ないも同然。それでも、〈機獣少女〉になるのであれば確認しておかねばならん——その意志が本物か否かを」

今ならまだ引き返せる——カグツチの瞳は言外にそう語っている。

「……………」

冷静に考えれば、無茶な事を言ったと思う。

自分に戦いなど出来るのか?

力があっても、それを使いこなせる保証などない。

だが、それでも――

「うん。やるよ。出来るか判らないけど、戦わないと護れないなら。それで誰も死なずに済むなら――私が戦う」

出来得る限りの決意を込めて、やみひめはカグツチの問いに答えた。

それに対し、カグツチは再び、満足げに不敵な笑みを浮かべた。

「その意気や良し。其方の覚悟を笑う者もいるだろう。だが、私には好ましい理由だ」

「私を〈機獣少女〉にしてくれるの？」

「うむ。仮初なれど、流遠やみひめを〈機獣少女〉として認める。契約を望むなら、ここに証を示せ」

カグツチが左手の甲を差し出す。漫画などでよく見る、騎士が忠誠を示すために、婦人の手の甲に行くあれをやれと言っているのだろう。

「えっと……」

女同士だから緊張する事などないのだろうか、やはり照れ臭い。カグツチの手の甲を前に、やみひめがためらっていると――

「さっさとするがよい。わ、私とて、その……恥ずかしいのだぞ？」

ほんの少しだけ頬を赤く染め、カグツチの視線が泳ぐ。容姿や雰囲気割りに、意外と初心なのかもしれない。

その様子を見て、恥ずかしいのはお互い様だと判ると、やみひめの緊張が少しだけ解けた。そして変に意識せず、自分の唇を、カグツチのきめ細かい肌にそっと触れさせた。

その瞬間、やみひめは自分とカグツチの間に見えない経路のようなものが出来た気がした。そこから流れ込んでくるカグツチの膨大な知識と記憶。狼のような姿をした巨大な機動兵器。それを操縦する、見覚えのある青年。そして、その青年と寄り添う、カグツチによく似た娘……。様々な情景が浮かんでは消えていく。

「今の、カグツチの記憶？」

「…………大昔の事だ。忘れてしまえ。私自身、もう覚えてはおらん」

そう言ったカグツチの表情は、どこか悲しかった。

「これで契約は完了だ。其方は〈機獣少女〉となった。ツバキを助けてやってくれ」

「うん。そのための力だもんね」

先ほどの映像の事は今は忘れよう。まずは戦って、生き延びないといけない。

「お願い、カグツチ――力を貸して！」

「うむ、心得た」

第二話

『機獣少女、続けます』

てきて、手が震える。

「だけど——」

『臆するな。其方の障壁なら奴は突破する事は出来ん——大丈夫だ』

そう言つて〈カグツチ〉が励ましてくれた。だったら、信じるだけだ。

「う、うん！」

『良い返事だ。三秒後に目くらましの爆発を起こす。それに乗じて一度、奴と距離を取れ。』

ここではツバキを巻き込んでしまうからな』

「うん、判つた！」

『三、二、一——スタン・ブラスト！』

〈カグツチ〉の掛け声で、ものすごい轟音と閃光が走つた。予告されてなかったら、私の方が驚いてパニックになっていたと思う。それでも、ちよつと驚いたけど。

私はツバキを抱き上げて、『スライム』から見えない木の陰に身を潜めた。そこで、自分の身体の異変に気付いた。ツバキを軽々と運べたし、普段より速く走れた。

「私の身体、強くなつてる……?」

「機獣少女」になると身体能力が強化されます。あくまで人間の範疇はんちゆうですが、今の貴女あなたなら、並の人間相手に負ける事はまずありません」

私の疑問にツバキが答えてくれた。きつと場慣れしてるんだと思う。戦えない状態なのに、取り乱してる様子はない。

「その衣装は『MBジャケット』。肌が露出している部分も、不可視の防護膜が覆っているので、人間が使うような通常兵器クラスの攻撃なら耐えられます」

本調子じゃないはずなのに、ツバキは私の状態を説明してくれる。

「そして、貴女の持つている〈カグツチ〉——それは〈機獣少女〉が効率よく力を使うための『MBデバイス』です。〈カグツチ〉と契約を交わしたのであれば、使い方は識しつていないはずですよ」

「うん。〈カグツチ〉の記憶と一緒に視みた」

私の答えに、ツバキは微笑と共に頷うなずいた。やっぱり、変身を解いたツバキは、解く前と雰囲気が違う。

『——やみひめ、そろそろ目くらましの効果が切れるぞ』

「判つた。じゃあ、行つてくるね」

〈カグツチ〉の言葉に応じ、ツバキにも声をかける。

『やみひめ』……素敵な名前ですね。不思議と心地良い響きです」

そこで気付いた。ツバキにはまだ名乗っていない事に。そういえば、ずっと『貴女』っ

て呼ばれてた。変な名前だっって言われる事が多いから、褒められると嬉しいけど、こそばゆいな……。

「ありがとう。後で、ちゃんと自己紹介するね」
「はい。楽しみにしています」

一度ツバキと笑顔を交わして、私は木の陰から飛び出した。出来るだけ『スライム』の目を引くように。あれは自分にとっての脅威度が高い相手から襲う習性がある。だから、私が目の前にいる以上、周りの人間を襲ったりはしないはず。全部、〈カグツチ〉から流れ込んできた知識だから確証はないけど。

——うるうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！

私に気付いた『スライム』が咆哮を上げた。どんな猛獣の鳴き声とも違う、聴いた事がない、それでいて不安感を誘う得体のしれない叫び。

不気味だった。

『——呑まれるな。威嚇いかくをしてくるといふ事は、奴も其方そなたの力に気付き、警戒しておるのだ』

「そういうの、判る相手なの？」

『一応、知能らしきものはあるようだ。意思の疎通は出来んがな』

「それじゃあ本能で敵を判断する獣けものと一緒にやない!？」

『獣か、言い得て妙かもしれないな。どの道、〈機獣少女〉と奴は、やるかやられるかだ』

「そんな……」

『スライム』には知性がある。私も、はっきりと敵意を感じた。顔に当たる部位はないのに、目に相当する器官もないのに、はつきりと『見られている』感覚がある。生きてるんだと思う。生きてる以上、自分に害になるものは排除しないとイケない。『スライム』にとつては私を。私にとつては『スライム』を。

……殺すの？ 私が？

途端に、胃液が逆流してくるような吐き気に襲われた。平和な国に生まれて、平穏に生きてきた。事件や事故にも遭わず、近しい人が傷付いたり、死んだりした事もない。

うるうん、事件には遭ったばかりだ。けど、私もアサトも無事に生きてる。だけど、この状況は——

『……自分の置かれた状況をようやく認識したようだな。これから其方がしなければならん事も』

私の考えてる事が〈カグツチ〉には読めたみたいだ。その上で、私に……と遠回しに言う——あれを殺せと。

「無理だよ、殺すなんて……。殺さずに倒す方法とかないの？」

『ない。一時的に行動不能にする事は出来ても、恒常的に動きを封じる手段がない。言ったであろう、やるかやられるかだと』

「そんな……」

私の戦意が萎えたのを感じたのか、『スライム』がまた突進してきた。私は障壁を張って、それを防いだ。弱っているせいも、さつきよりも勢いが無いように感じる。だけど——

『どうした？ 力の使い方は判っているはずだ。其方の成すべき事を成せ』

「でも……」

『やるのだ！ 何のために〈機獣少女〉になった!？』

〈カグツチ〉の機械音声が初めて声を荒げた。判ってる。他に手段なんてない事も。自分が生きるために、相手を殺す事の正当性も。だけど、理屈はそうだとしても……!

「そうかもしれないけど……!——」

判ってる。けど、どうしていいか判らない。判ってるのに判らない。

「ごめんなさい……私、自分で大見得切ったのに、口ばかりで、戦えなくて、役に立てなくて……」

出てくるのは弱音ばかりで。そんな自分が情けなくて。涙が出そうになる。

『……仕方あるまい。其方はあくまで仮初の〈機獣少女〉だ。これ以上を望むのは酷であらうな』

〈カグツチ〉の言葉が胸に痛い。いつそ責めてくれればいいのに、その口調には非難するような響きはなくて、むしろ慰めてくれているように聞こえる。

「……………」

『一つだけ、現状を打開する術がある』

どうする事も出来ず、無言で『スライム』の突進を防ぐための障壁を張り続けていると、〈カグツチ〉が口を開いた。

『その身体——私に貸せ。私が其方に代わって戦おう』

「どういふ事……?」

『言葉通りだ。奴を殺す事のためらいがあるなら、私が代わろう。そうすれば、すべては私の意思だ。私の罪だ。どの道、奴は殺さねばならん。ならば、その罪——私が背負おう』

そう言う〈カグツチ〉の口調には、やっぱり責めるような響きはなくて。私を労わってくれているように感じられて。私は自分が情けなくて。だけど……。

「……………判った」

もう、どうしていいか判らなかつた私は、思考を放棄するように〈カグツチ〉の提案に身を委ねる事にした。

『ならば唱えよ。『ユー・ハブ・コントロール』——と』

「お願い、〈カグツチ〉……ユー・ハブ・コントロール！」

私は自分の情けなさに泣きだしたい気分で叫んでいた。

『心得た。——アイ・ハブ・コントロール！』

〈カグツチ〉の応答と共に、私は自分の意識に、別の誰かが入ってくるような不可思議な感覚を覚えた。自分が自分じゃなくなるような、だけど、それも自分である事に変わりはなくて、〈機獣少女〉に変身した時の内側が書き換わっていく感覚とは違う、肉体そのものが変わっていく感覚……。

なんだろう……すごく、眠い——



それは夢を見ているような感覚だった。自分は夢の中にいるのに、それを俯瞰ふかんして見ているのも自分という、あり得ない状況。

場所には見覚えがある。ここは〈想刻の間そうこく〉だ。

「せっかく逢あいに来たのに、つれないな」

声をかけてきたのはアサトにそっくりの男の人で、アサトが大人になったら、こうなるんじゃないかと思うくらい似ている。急いそだったけど、これは夢だから驚かない。だって——夢ゆめってというのは、そういうものだから。

「べ、別に私が頼たのんだ訳ではない」

アサト（そっくりさん）の言葉に不機嫌そうに、可愛げのない態度をとってるのは、長い黒髪をポニーテールにした黒い和服の、年齢で言えば二十歳手前くらいの女の人。それは〈想刻の間〉で会った時のカグツチの姿に似ていたけど、夢の中の私は、どういう訳かその女の人になっていた。

「まあなんだ、こうして逢あうのは久しぶりだな——ヤミヒメ」

アサト（そっくりさん）が私の名前を呼んだ。少し発音が違う気がしたけど、やっぱり、この女の人は私なんだ。

私、大人になったら、こんな風になるのかな？

「……まったくだ——我が主よ」

夢の中の私は、変わらず不機嫌そうにそう言った。けど、頬は薄っすらと赤くなってるし、耳と尻尾がびくびく動いて、そわそわしているのがバレバレだ。

そう、夢の中の私には狼みたいな耳と尻尾が生えている。なんでだろう……？ それに

アサト（そっくりさん）の事を『主』って呼んだ。これって、『ご主人様』って意味なの？

え、それってどういう事……？

未来の私って、アサト（そっくりさん）とそういう関係になってるの!?



「——やみひめ、いい加減に起きろ」

パニックになっていた意識が、急速に現実呼び戻された。

（あれ、さっきの夢……？）

ん？ 声がおかしい？ 違う、声は私だけど、聞こえ方がおかしいんだ。自分の声がスピーカーを通して聞こえてるみたいな違和感。じゃあ、今の声は？

「ようやく気付いたか。状況は把握しておるか？」

私の声じゃない。けど、スピーカーを通していない肉声だ。それに聞き覚えもある。

（カグツチ）なの……？

「そうだ。今は其方の身体を借りて話している」

（私の身体……？）

——『その身体——私に貸せ。私が其方に代わって戦おう』

意識を失う前の（カグツチ）の言葉を思い出す。どういう事だったんだろう？

「——やみひめさん」

すぐ隣りから声があった。そちらを向くと、ツバキが私を見上げていた。

（あれ？ ツバキ、縮んだ？）

「違う。其方が大きくなったのだ」

（どういう事？）

「自分の姿を見てみるがよい」

（カグツチ）の言葉に従って自分の姿を確認する。まず気付いたのは服装が変わっている

事。上は和服のままだけど、下はミニスカートじゃなくて、丈の長い袴はかまになってる。次に気付いたのは体型。プロポーションを隠しやすい和服の上からでも判るくらい、胸が存在を主張している……。それに手足も伸びてて、地面が遠い。視線が高い。ツバキの背が縮んだように感じたのは、私の背が伸びてたんだ。

(ツバキ、鏡持ってる!?)

「ん。ツバキ、鏡を見せてやってくれ」

「ちょっと待ってください」

私の声はツバキには聞こえていないらしく、〈カグツチ〉が伝えてくれた。その声は現実世界での機械音声とも、〈時刻の間せうこく〉で聞いた肉声——厳密には違うのかもしれないけど——とも違う。自分の声は自分では正しく聞こえないというけど、これは私の声のような気がする。

「どうぞ」

ツバキが小さな手鏡を取り出して、鏡面を向けてくれた。そこに映っているのは私じゃなくて、だけど私の面影おもかげがある女の人だった。

(なんで!? ねえ、どういう事!?)

「騒ぐな。すぐに返す。私の言葉の後に、『アイ・ハブ・コントロール』と唱えよ。ユー・ハブ・コントロール」

(あ、アイ・ハブ・コントロール!)

訳が判らず、言われるがままに、言われた通りの言葉を唱える。すると、夢を見る直前に感じた、自分の意識に、別の誰かが入ってくるような感覚とは逆の、出ていくような感覚を覚えた。そして——

「……………んっ」

身体の外側が書き換わっていく。それが終わると軽い倦怠感が襲ったけど、自分の身体が元通りになっていた。袴状だった衣装はミニスカートになり、手足も元の長さになって、グラビアアイドルみたいだった胸も、小さくなっていった。……ここだけは戻らなくてもよかったかもしれない。あとは——

「こ、声は!? あーあー、隣の柿はよく客食う柿だ!」

「地球の柿は人間を食べるんですね」

大丈夫。聞き馴染んだ私の声だ。スピーカー越しじゃなく、肉声で聞こえる。ツバキが苦笑して何か言ってたけど、今はそれどころじゃない。

「ツバキ、鏡もう一度見せて!」

「はい」

鏡を覗きこむ。そこに映っているのは見慣れた小学六年生の女の子——私だ。狼みたいな耳は生えてるけど。

「……………よかった。元に戻ってる」

「おつかれさまです。もう〈解放〉^{リリース}しても大丈夫ですよ」

「うん——〈解放〉^{リリース}」

〈機獣少女〉の変身を解くための終^{コンクルージョン・ヴォイス}了^{コンクルージョン・ヴォイス}言語^{コンクルージョン・ヴォイス}を唱える。すでに〈カグツチ〉の知識があるから疑問もなく唱えたけど、これって睡眠学習みたいなものなのかな？ 副作用とか……………ないよね。

変身が解けて、服が元のものに戻る。頭と腰にあった、狼の耳と尻尾の感覚もない。念のため触って確認する……………うん、なくなってる。

「……………なんか、どっと疲れた——」

全身の力が抜けて、私はその場にへたり込んでしまった。そのまま、服が汚れるのも構わずに地面に仰向けになる。けど、硬いはずの地面の感触はなく、枕みたいに柔らかい感触が背中にある。

「？」

不思議に思って振り向くと、ツバキが私の身体を支えてくれていた。

「大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫。ありがとう」

「いいえ」

「ツバキってさ……………」

「はい？」

「胸、大きいんだね」

私を支えてくれるのはツバキの手だけじゃなくて、全身。私の背中に当たってる柔らかい感触は、つまりそういう訳で。

「着痩せするタイプなんだ？」

「……………」

「ツバキ？」

「……………知りません」

どんな顔をしているのだろうと、もう一度ツバキの顔を見ようと振り向——こうしたら、がっしりと両側から頭を固定されて出来なかった。

『——胸の事には触れてやるな。気にしておるらしい』

黒い勾玉状態——待機モードらしい——になった〈カグツチ〉が機械音声^{マシン・ヴォイス}で告げてく

る。

そうなんだ。うん、誰だってコンプレックスはあるよね。

何気なく空を見上げる。横は向けないけど、上は向いていいみたい。すっかり暗くなつて、さつきより星が綺麗に見える。

「あれから、どうなったの？ 〈カグツチ〉に身体を貸してから、記憶がなくて、何も覚えてないんだ」

「あと一步のところまで追い込んだのですが、逃げられました」

私の質問に答えるツバキの声は、少しだけ沈んでいた。MBデバイスが使用者の身体を間借りする事自体が稀で、更に契約を結んだばかりの慣れない他人の身体では、力を十全に発揮するのは難しいそうだ。

「そっか……ごめんね、私、ちゃんと戦えなかった」

「いいえ。普通に暮らしていた一般人に、ちゃんと戦えという方が無茶なんです。むしろ

私は、あなた貴女の勇気に敬意を表します」

「あはは。ツバキは大人みたいやしやべり方するね。胸も大きいし、もしかして中学生く

ら〜」

「……胸は余計です。ちなみに、小学五年生です」

「年下だったんだ。私、六年生」

「じゃあ、やみひめさんは先輩ですね」

「後輩に胸で負けたー。悔しいー」

「……わざと言ってますよね？」

もちろん、わざと。けど、半分は本音だったりする。男の子は大きい方が好きだってい

うし、アサトはどうなんだろう？ 次に逢ったら訊いてみよう。

そうだ、また逢える。

だって——生きてるんだから。

「……………生きてるんだね。私も、ツバキも」

「はい。貴女のおかげです」

「まだ、あの『スライム』も生きてるんだよね？」

「奴の事ですね？ はい、生きています」

「これから、どうするの？」

「瀕死の状態までダメージを与えましたから、しばらくはまともに活動出来ないでしょう。その間に補足して、とどめを刺します」

「そっか」

「はい」

ツバキに告げる言葉が見つからなくて、会話が途切れる。ううん、そうじゃない。告げるべき言葉は決まってるのに、それを口にする勇気がないんだ。戦う怖さを知ってしまったから……。

「あのね、ツバキ——」

「協力に感謝します。貴女のおかげで助かりました。あとは私の仕事です」

私の言葉を遮って、ツバキは言った。その口調には『これ以上、関わらない方がいい』という意味が言外に込められていた。

私の心が揺らぐ。ツバキを手伝ってあげたい。けど、いざ戦いになった時、また〈カグツチ〉に任せてしまおうとしたら……それは、とても無責任な気がした。

でも、だけど……！

『——本当にそれでよいのか？』

〈カグツチ〉が唐突に会話に割り込んだ。それはツバキに向けた言葉だと思うけど、まるで私に向けて言ったようにも聞こえた。

「どういう意味ですか？」

『ツバキ、其方のMBコアの活性値は平常値に戻っておらん。やはり、ここはゼヘナではないのだろう。其方のMBコアは、この惑星の大気組成には不適合なのかもしれない』

「……………」

『それでは機力が回復するまで、相当な時間がかかる。万全な状態になるまで待てたら、奴も回復してしまうだろうな』

「……何が言いたいんですか？」

『言わずとも判っておろう？』

〈カグツチ〉の言葉にツバキの表情が曇る。今の会話の流れで、〈カグツチ〉が言いたい事は私にも判る。だから、ツバキに判らないはずがない。

だけど、ツバキには言えない。それは、自分の意地とかプライドとかじゃなくて、相手の生き死にに関わる問題だから。

自分の命は投げだせる。でも、それを他人に強いる事は絶対にしない。

出会って、ほんのわずかな時間しか経ってないけど、それで十分に判る。

ツバキは悲しいくらいに優しいんだって。

こんな優しい子の表情を曇らせていいはずない。

きつと、今までもたくさん戦って、悲しい想いもたくさんしてるはずだから。

助けてあげたい。

出来る事があるなら、手伝いたい。
だから――

「私――〈機獣少女〉、続けるよ」

私の言葉に、ツバキが振り返る。その表情には、驚きと喜び、そして申し訳なきが入り混じっている。

私がツバキと出会ったのは偶然かもしれない。

でも、私には戦える力があって、それでツバキの役に立てるなら。

私がツバキの代わりに戦うべきだ。

もし逆の立場だったら、ツバキもそうしてくれると思うから。

こうして普通の女の子だった私は、〈機獣少女〉を続ける事になった。

あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第二話をお届け致します。

前回のラストで「機獣少女」になる覚悟を決め、変身自体はあっさり成功してしまいましたが、実は契約のシーンがちゃんとありました。アバンのパートがそうです。第一話に組み込むとページ数が更に増えますし、テンポも少し悪くなると判断して、こういう形となりました。契約シーンは大事ですし。

あとはまあ、主に仮想空間とか、そこでの「カグツチ」の人間形態とか、昔の作品を知っている方は「おや？」と思っただけなのではないかと。今回はバトルをやること書きましたが、派手なシーンは割愛です。手抜きではありません。やみ子の意識が眠っていたので仕方ないんです。べー別に、書きたくない訳じゃないだからね!?(無駄ツンデレ)。しかしなんというか、ツバキが書きやすいです。やみ子は好んで書きたいタイプの主人公ではないので。いや、もちろん楽しいんですけどね。けど、書いていて一番ほっとするのは「カグツチ」なんです。慣れって怖い。

それでは謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。次回から、ツバキがどこから来たかとか、説明とかやります。退屈にならない程度に。それでは、今後も『ゾイやみ』をよろしくお願いします。

——ロリ巨乳って、ロマンですよね？

2014 / 10 / 08 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る